

今日から実践 包括的審美歯科技工

機能的咬合面形態とポーセレンレイヤリング

増田 長次郎 著

医歯薬出版株式会社





fig. 16 下顎運動の軌跡

下顎はローリングしながら A コンタクト（作業側）に入射し、B コンタクトを通過して、垂直成分を強めてやや遅れて C コンタクトに達する。そのため、斜め卵型では A 斜面は水平に、C 斜面は斜めに咬耗し、逆三角形型では逆側方彎曲の咬耗になる。

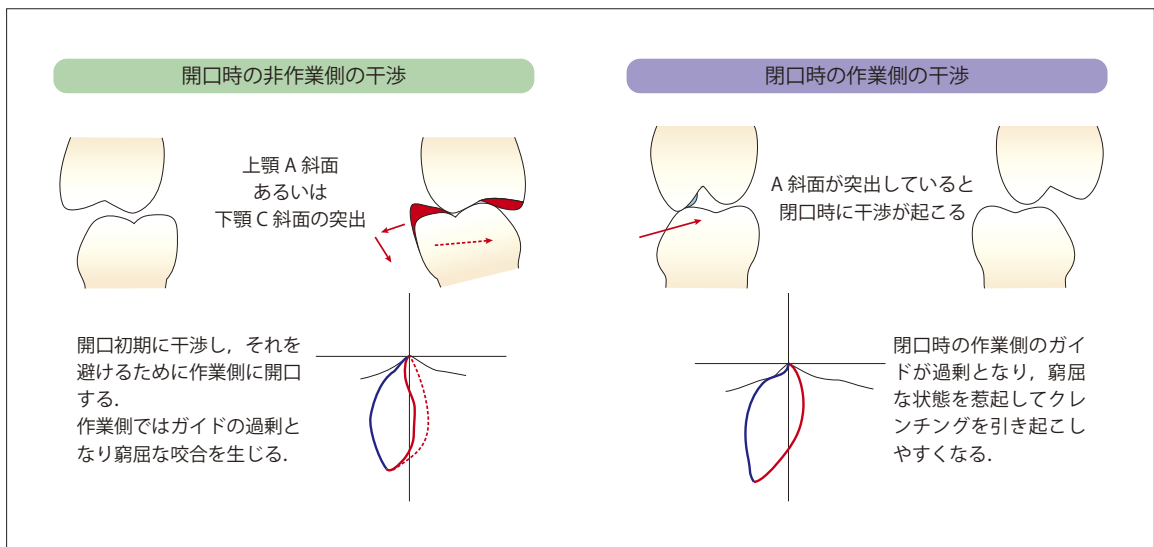


fig. 17 開口時と閉口時の干渉

開口初期、非作業側（運動の外側）は水平成分を強くもって運動しようとするが、下顎 C 斜面が突出していると干渉を避けるためにリバースしてしまう。このため、筋の過緊張を引き起こす。この場合、偏咀嚼となったり、下顎偏位を起こす（谷歯科医院・谷 昌樹氏のご厚意による）。

■ Bコンタクト(B点)の設定基準：上顎舌側咬頭内斜面中央部，下顎頬側咬頭内斜面中央部，圧断

■ Cコンタクト(C点)の設定基準：上顎舌側咬頭頂の外側1.0mm，切断

Bコンタクトは上下顎の歯の各隆線の中央部あたりに設定する。Cコンタクトは、Aコンタクトと同様に咬頭傾斜角を小さめするため、上顎舌側咬頭頂の外側1.0mmの箇所に設定する。下顎は、Cコンタクトより舌側寄りのテーブルが上顎のC斜面に立ち上がらない(抱え込まない)ようにしておかないと、開口時は非作業側、閉口時は作業側の水平成分が多くなるため、干渉が起りやすくなってしまう。これはグライディングタイプの逆三角形型の場合にみられる典型的な症状である。同時に、開口時の早期干渉(後方の干渉)や過剰なガイドを防ぐための削合も必要となる(fig. 17)。

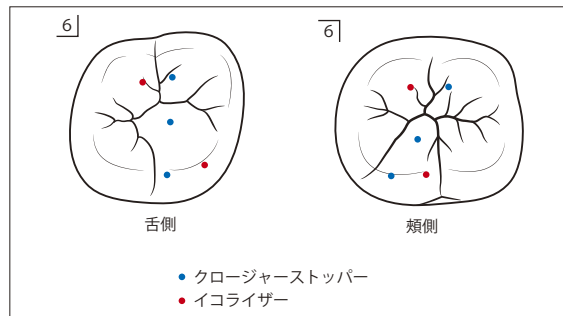


fig. 18 クロージャーストッパー(閉止点)とイコライザー(平衡点)
顎関節、筋、咬合の三次元的な調和のなかで、咬頭嵌合位における近遠心的・頬舌的の接触点は、Bコンタクトを起点として距離が長くなる。すなわち、Bコンタクトと両Aコンタクト(Aクロージャーストッパー・Aイコライザー)を結ぶ三角形は大きくなる。Cコンタクトも同様である。

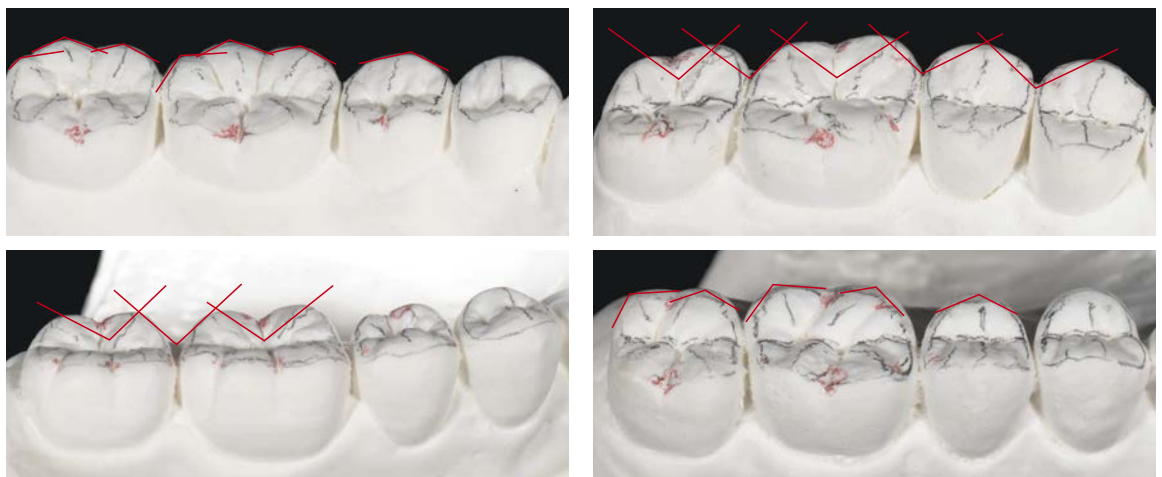


fig. 19 連続性と整合性の得られた咬合面形態

咬合平面に対し、咬頭、隆線(辺縁隆線含む)、頬舌的・近遠心的な咬合面展開角、前後的・側方的彎曲の連続性を付与する。

2) 咬頭嵌合位の近遠心的安定(クロージャーストッパーとイコライザー)

クロージャーストッパーは上顎各咬頭の遠心斜面と下顎各咬頭の近心斜面の接触点で、咀嚼運動時の終末位(閉止点)となる。一方、イコライザーはその平衡点で、上顎各咬頭の近心斜面と下顎各咬頭の遠心斜面の接触点により下顎の後退を防止する(fig. 18)。限界運動でも機能運動でも、“時間差”によりサイクル内側は垂直成分が強く、外側は水平成分が強いことや、顎関節、筋、咬合の三次元的な調和が求められることを踏まえたうえで、咬頭嵌合位の頬舌的安定(ABCコンタクト)をはかるときと同じように、クロージャーストッパーとイコライザーを設定して近遠心的安定を求める。そして、咬合平面を基準として、咬頭、隆線(辺縁隆線含む)、頬舌的・近遠心的な咬合面展開角、前後的・側方的彎曲の連続性を付与する(fig. 19)。連続性や整合性を逸脱するような極端な咬合関係(接触点)はクレンジングや後方の干渉を引き起こす場合があるので注意し、特にクレンジングや干渉を誘発する可能性が高い上顎舌側咬頭頂と下顎中心窩付近、下顎頬側咬頭頂と上顎中心窩付近には十分に配慮する。

⑤ 隣接部を0.5mmカットバックした後、筆を鋭利にして指状構造を形成していく。この後、ボディ陶材よりも明度の低いエナメル陶材を築盛すると、深くカットバックしたところは必然的に透明感が増す。そのサジ加減は経験や感覚が必要になってくるかも知れない。



⑥ カットバックした量のエナメル陶材を築盛する。だいたい10～20%程度の焼成収縮を見込んで大きめに築盛する。基本築盛の場合、ボディ陶材とエナメル陶材で全外形を整え、この段階で天然歯でいう象牙質の構造ができあがると捉えてよい。収縮した分が天然歯でいうエナメル質の部分になる。

ここでは、E₂とブルー系のラスター（T Blue）を築盛。

